

親方グルジェフ - G. I. Gurdjieff Maître

(出典 : Tcheslav Tchekhovitch, "Tu l'Aimerais" pp. 15-17)

1923年、プリオーレ。

プリオーレは、忙しさのなかで活気を帯びていた。ムッシュー・グルジェフはあちこちを飛び回った。彼は学院の基礎を整えるための作業を急がせた。彼はもう、その後の活動の計画を立てていたのである。彼は週の何日かをパリで過ごし、それ以外はプリオーレで過ごした。

私は彼がみんなより先に寝たり、みんなより後に起きたりするのを一度も見なかった。彼のなかでは複数のモーターが日夜を通じて交代で回っているようだった。いつかは消耗するだろうと思わざるをえないのに、顔にも体の動きにも、疲れの気配を見せることがなかった。

彼がプリオーレを留守にしている何日かのあいだに、われわれは、二つの区画を追加された蒸し風呂の仕上げという大仕事を終わらせた。私は現場でセメントを扱い、排水路と円柱群を仕上げた。私はその仕事を気に入っていて、ていねいに心を込めて、表面をなめらかに仕上げた。大方の仕事を終えたのは午後の五時ぐらいで、夕食にはまだ優に二時間もあり、自分が心から愛するこの仕事をゆっくり丹念に仕上げることができた。仕事を終えたとき、私は満ち足りていた。私の為し終えた仕事を見てムッシュー・グルジェフがどれほど喜ぶだろうと思うと、とりわけうれしかった。

軽い足取りでほとんどスキップしながら、夕食の席に臨む前に着替えなければと、シャトーの建物のほうに戻って行く途中、ムッシュー・グルジェフの姿を目にした。彼は庭園の小道に沿ったベンチに座り、プリオーレに来たばかりの婦人と話をしていて。帰ってきたばかりなのに、もう仕事をしている様子である。私は彼のところに走っていきたい気持ちを抑えきれず、彼が話かけてくれるのを期待して、その小道へと針路を変えた。

通りすがりにあいさつすると、彼は私が待ち望んでいた質問をしてくれた。

「チェコヴィッチ、なんでそんなにうれしそうなのか？」

「水路と円柱を仕上げたんです」

「で？」

「とってもうまくできたんです。だからうれしいんです」

「君がやったのか？ うまくできたのか？ 君がそこまで言うほどのものなら、ぜひ見せてもらいたいものだ」

ムッシュー・グルジェフは立ち上がると、それまでいっしょに話をしていた婦人に向かって「マダム、ここで待っていてください。すぐに戻ってきます」と言った。

「さあ行こう」と彼は言ったが、その声の音色を聞いて、私のうきうきした気分には一抹のかけりが生じた。

蒸し風呂のなかに入ると、ジオルジ・イヴァンチ [グルジェフ] は、私がどこを仕上げたのか見せてくれるように言った。私はそれを見せた。

「君は大胆にもこれをうまくやったと言うのかね？ もしもこんなふうに私のもくろみをだいなしにしてしまうとわかっていたなら、君にこの仕事を任せることはしなかった」

ジオルジ・イヴァンチは、こてを手に取ると、私が丹念に仕上げた作品を削りだした。

「急げ。君もこてを取って手伝いなさい。このまま完全に固まってしまう前にこそぎ落とさなければいかん」

私にとって、これは心臓への一突きだった。やがて、ムッシュー・グルジェフは、いかにも私に対して不満げに、次のような言葉をもって、私を厄介ばらいした。

「あとはだれかがうまく仕上げしてくれるだろう。君は馬小屋に行き、堆肥にする糞を集めなさい」

ムッシュー・グルジェフが去った後、私は馬小屋に行ったが、そこは見事にきれいになっていて、堆肥もだれかが片付けた後だった。

翌日、私は蒸し風呂を見に行き、水路と円柱はきれいにやりなおされていた。だが、だれが夜どおしで、この仕事をやりなおしたのか？ 現場に落ちているタバコの吸殻で、私はそれがだれなのかわかった。だが、仕上げ具合は私より上手とは思えなかった。そこで私は考えたのである。なんでいったん仕上がった仕事をこんなふうに破壊したのか？ パリでの仕事や活動で疲れていたはずなのに、あのとき彼は、おそらくふたりの

どちらにとってもそんなに意味があるものではない話をするために時間を費やしたのか？ ムッシュー・グルジェフは気が変なのか？ どうして余計な遠回りをし、しなくてもよいことをするのか？ どうしてひとりの人間に何かを教えるというぐらいのことで尋常ではない努力をするのか？ 心を込めて仕上げられた見事な仕事をあっさり壊してしまうのはどうしてなのか？

そのときには私はこれが理解せず、理解できるはずもなかった。

とても長い年月の後に私はこれを理解した。